

学生が福島、宮城訪ねる

東日本大震災から7回目の「3月11日」を迎える。被災地の多くは復興がままならず、その爪痕は大きく残ったままである。宗門校・筑紫女学園大学（福岡県大宰府市）は震災翌年の2012年春から毎年数回ずつ、学生ボランティアが若手、宮城、福島に赴き、交流会で郷土料理を手作りし、現地の語り部から話を聞き、被災地の思いに触れる活動を続けている。今回も2月19日から5日間、学生14人が被災地を尋ねた。

東日本大震災から7年

筑紫女学園大



同大学は、宗門校の学生として何かできることをと、2012年から毎年春と夏に2回ずつ、東日本大震災の被災地を訪ねて交流会を開いている。東北の人たちは若い学生の訪問を楽しみにし、また、学生は活動を通して、いのち、人に寄り添う大切さなどを学んでいる。

ボランティアには毎回、多くの学生が参加を希望し、今回も抽選で選ばれた14人が参加した。2回目の参加となる堤ゆいさん（3年）は「自分にも何かできないかと、1年の時に初めて参加した。その時、被災者の方々に『また来てね』と声をかけられた。その約束を果たさうと再び参加した」と話す。

学生たちはまず、福島県浪江町に向かった。事故を起すした東京電力福島第一原子力発電所を高台から見下ろし、規制が解かれた地域を訪ね、人が住める状況ではない現状を目の当たりにした。

次の日には、福島市の福島県復興支援事務所で、浪江町・常福寺の廣畑恵順住職から福島の現状を聞き、同市などで避難生活を送る同寺門徒が集まり交流会を開いた。学生を引率する宇治和貴准教授（熊本市・廣福寺副住職）が法話を行い、学生は福岡名物の「水炊き」を手作りした。そして、食事をしながら震災当時の様子などを聞

福岡の味と心を届けて交流会

いた。

宮城県では、仙台市の復興公営住宅を力所で交流会を開き、学生は住民と一緒に、福岡の郷土料理「がめ煮」と「梅ヶ枝餅」を作った。

若林区の若林西復興公営住宅の集会所には住人25人が集った。学生の訪問で笑顔が広がった住民たち。「若い人たちと一緒に料理ができて、楽しい時間を過ごさせてもらった」「福岡まで行くことはなかなかできないから、交流会を楽しみにしていた。初めて食べた梅ヶ枝餅はおいしかった」と喜んだ。4時間ほどの交流で、お互いを名前呼び合うほどになり、帰り際には別れを惜しむ声が上がっていた。

また、宮城野区の燕沢（つばき）東復興公営住宅でも同様

に交流会を開き、住民たちと親交を深めた（写真）。制野洋さん（88）を介して、皆うれしくて元気をもらえた。来年もぜひ来てほしい」と笑顔で話していた。

「被災地の現状を社会に」

ボランティアを終えた学生たちは、同市青葉区の仙台別院に併設されている東北教区災害ボランティアセンターで反省会を開き、活動を振り返っていた。

初めて参加した藤野奈央さん（2年）は「大震災から7年が経ち、最近報道もあまりされなくなり、現状を知ることが難しくなっている。現地に来て、復興はまだ終わっていないことを思い知

らされた。現状をもっと社会に発信していかねればいけないと強く感じたと話した。

約束を果たさうと参加したという。筑紫女学園は浄土真宗のみ教えが建学の精神。それを胸に、学生たちが自主的に気付きや学びを高められるように、今後もこの活動を続けていきたい」と話した。（8面に関連記事）

若い人たちと一緒に食事したり、いっぱいお話をしたり、皆うれしくて元気をもらえた。来年もぜひ来てほしい」と笑顔で話していた。

宇治准教授は「学生たちにはこの活動だけに満足せず、私たちは多くのいのちに生かされていることを、新たな価値観、考え方を学び、それを社会に向けて発信することを考えるきっかけにしてほしい。

筑紫女学園は浄土真宗のみ教えが建学の精神。それを胸に、学生たちが自主的に気付きや学びを高められるように、今後もこの活動を続けていきたい」と話した。